

國學院大學学術情報リポジトリ

宿坊経営における女性家族の役割：
武州御嶽山を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高田, 彩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000529

宿坊経営における女性家族の役割 —武州御嶽山を事例として—

高田 彩

1. はじめに

本研究の事例である武州御嶽山（現東京都青梅市御岳山）には、30軒以上の宿坊が現存している。全国的に見ても、一山に30軒以上の宿坊が残っているのは山岳信仰の聖地としてはレアなケースであるが、一方で、宿坊運営の実態に目を向けてみると、神社の職務や冬期の配札活動（講社廻り）によって宿坊を留守にすることが多い御師に代わって、宿坊を運営するのは御師家の女性家族、特に妻であるという事実が気付く。しかし、これまでの山岳修験研究においては、宿坊経営の実態にはあまり光が当てられてこなかった。

また、御嶽山に関する先行研究での議論の中心は、御嶽神社の運営組織や御師の配札活動、御嶽講の講組織に関する問題であり、宿坊運営における御師家の女性家族の役割については議論の俎上に上がることがほとんどなかった〔齋藤1980〕〔西海1983〕¹。

御師家の妻の役割を扱った唯一の研究としては、小泉凡の研究が挙げられる〔小泉1986〕。御師家の妻は、夫が講社廻りをする期間、留守を守り、夫の役目の代行をすべて果たすことが求められ、その仕事内容は、火の用心を唱える夜番の仕事、冬期の雪かき、山への薪とり、畑仕事、水汲みなどであったといわれている。しかし、昭和40（1965～）年頃からは、講社廻りに車が使用されることになり、その期間が相当に短縮されたため、留守中の仕事もずいぶん軽減されたようだ。加えて、講員の宿泊に際する対応を行い、直会における口取、さしみ、吸物など日本料理の基礎及びその出し方、立ち振る舞いなどの知識も必要であったという〔小泉1986〕。

上記の研究では、御師家の妻の仕事内容が紹介されるに止まり、宿坊経営における御師家の妻の具体的な仕事内容とその内実、そこでの苦労などについては言及されてこなかった。

いわば、宗教的職能者ではない御師家の女性家族とその役割は、一山組織の周縁に位置付けられ、長い間、山岳修験に関する研究や御嶽山に関する研究史上において等閑視されてきた。しかし、一山組織の中心に位置付けられる宗教的職能者の御師とその役割に注目するだけでは、組織の全体像を明らかにすることはできない。その様態を論じるためには、御師家の女性家族に光を当てる必要があると考える。

本稿では、これまでの研究状況を踏まえた上で、宿坊経営における女性の役割とその変化に焦点を当て、①御嶽山の宿坊経営が近代化、観光化などによってどのように変化しているのか、②宿坊経営において御師家の妻はどのような役割を担い、どのような働きを期待されているのか。以上の二点を御師家の妻に対する聞き取り調査から得たデータにもとづいて検討することを目的としたい。

さらに、御嶽山の宿坊と御師家の妻に関する問題を広い視点からとらえるために、以下の二つの研究群を参照したい。一つ目は、旅館、おかみ研究である。後藤知美は、労働観とい

う問題に注目し、旅館のおかみとなった女性たちがどのような過程を経ておかみになっているのかを民俗学の立場から論じている〔後藤2012〕。

二つ目は、寺族、牧師婦人研究である。彼女たちは、両者とも宗教的職能者ではないが、僧侶や牧師の妻として寺や教会の運営をサポートする役割を担っている。川橋範子は、寺族について、「住職の補佐、子弟の育成、檀信徒の信仰上の模範となり、寺院の護持興隆に尽力する」立場であると説明し、川又俊則は、牧師婦人について、「教会学校の補佐、掃除や食事の支度、受付や配布物印刷などの事務作業を務める」立場とまとめている〔川橋2012〕〔川又2002〕。寺族、牧師夫人は、僧侶や牧師のように檀徒や信徒に対して直接的に信仰上の教えを説くことはしないが、寺や教会の運営をサポートする形で宗教集団を支える役割を担っている。宗教的職能者ではない彼女らに光をあてることは、宗教者の周辺を明らかにすることと同義だといえよう。その意味で、御師家の妻は宗教的職能者ではないが、夫である御師のサポートを行うという点で寺族、牧師夫人と共通点があり、比較の対象になりうると考える。

2. 調査地と調査対象者の概要

(1) 調査地の概要

東京都青梅市に存する武州御嶽山は、山上に武蔵御嶽神社を有する山岳信仰の霊場で、山上の集落は御岳登山鉄道ケーブルカー御岳駅（標高832メートル）から南へ御嶽神社（標高932メートル）に向かって伸びる尾根上に立地している。そこには40軒ほどの民家が密集しているが、その民家のほとんどは御師家で構成されており、それに明治以降の御嶽山在住者による土産物店や食堂が加わっている。御嶽山はそこで生活する人々にとって一つの地域であるだけでなく、御嶽神社を仲立ちとした諸儀礼や生活慣行を共通項とする集団社会の場という特徴を有する〔東京都教育委員会1986：1-2〕。また、御嶽山は宿坊の立地によって御師家の性格が若干異なる。御嶽神社に近く、比較的宿坊規模が大きいミナミ方と、ケーブルカー御嶽駅に近く、比較的宿坊規模が小さいサゲド方とに分かれている。また、サゲド方はミナミ方と比べて兼業の御師が多いという特徴がある。

御嶽山御師の主な仕事は、御嶽神社の祭礼諸役に従事すること、配札活動（講社廻り）を行うこと、講社や一般参詣客に対する宿坊運営を行うことである〔西海1983：294〕。特に、御師にとっての檀家（講社）の保有は、百姓の田畑、山林の所持と同じ意味を持つことから、檀家は御師たちにとって家産として観念されている〔靱矢2015：47-48〕。講は重要な経済基盤であり、講社を受け入れる宿坊経営は御師家にとっての大きな収入源といえる。西海によって明らかにされている明治期の御嶽講の檀家数を提示すると、関東地方を中心として、埼玉県がもっとも多く6万3600あまり、東京が4万7000あまり、神奈川が2万1000あまりとなっている。山梨県、千葉県、栃木県、群馬県なども含めると、講数は3485で、14万4900あまりもの檀家がいたとされている〔西海1983：68〕。

しかし、近年、実数を把握することはできないが、講数が減少していることが問題となっている。また、合わせて御師の数も減少傾向にあり、平成24（2012）年は33名、平成27（2015）年は31名に減少している²。

(2) 調査対象者の概要

調査対象者の基本情報は以下の通りである。

表 1 調査対象者の基本情報

話者	A	B	C	D	E	F	G
年齢	60代前半	70代前半	60代後半	70代前半	60代前半	60代前半	50代後半
経緯	アルバイト先からの嫁入り	アルバイト先からの嫁入り	非見合い	見合い	見合い	(兼業先)職場結婚	(兼業先)職場結婚
結婚した年齢	30歳(嫁入り)	21歳(嫁入り)	23歳(嫁入り)	25歳(嫁入り)	42歳(嫁入り)	22歳(婿取り)	23歳(嫁入り)
立地地域	ミナミ方	ミナミ方	ミナミ方	ミナミ方	ミナミ方	サゲド方	サゲド方

調査対象者である御師家の妻を仮に分類すると、以下の特徴がある。まず年齢層であるが、もっとも多い年代が、60代前半（A、E、F）で、ついで70代前半（B、D）、最後に、60代後半（C）、50代後半（G）となっている。また、結婚した年齢をみると、多くは20代で御嶽山に嫁いでいることが確認できる。

次に、御師家の妻になった経緯であるが、アルバイト先からの嫁入りが2名（A、B）、見合いが2名（C、D）、兼業先での職場結婚が2名（F、G）、非見合いが1名（C）となっている。最後に立地地域をみると、ミナミ方が5名（A～E）、サゲド方が2名（F、G）となっている。既述したが、サゲド方は比較的宿坊規模が小さく、兼業の御師が多い。FとGの御師家の妻になった経緯が、兼業先での職場結婚となっているのはそのためである。加えて、御嶽山に居住し御師業をしながら外に仕事を持つ場合、御岳登山鉄道（ケーブルカー）の始発が7時30分である関係で、出勤できる範囲がかなり限定されるため、現在の兼業先は御岳登山鉄道か農協になることを記しておく。また、この中で一人婿取りをしているFは、御嶽山の宿坊出身であるため、本稿の目的と照らし合わせると例外の話者になるが、聞き取り調査でのデータを本稿で使用していることから、合わせて紹介した。

3. 御嶽山と宿坊経営

本章では、御嶽山における宿坊の位置付けを説明したのち、御嶽山と宿坊経営において大きな影響を与えた三点を、御嶽山内の動きと御嶽山外の動きに分け、そして、特に重要だった事柄とその影響について論じていく。

(1) 御嶽山における宿坊の位置付け

御嶽山の御師にとって講は家産と同義であり、重要な経済基盤であることはすでに述べたが、本稿では御嶽山における宿坊を、御嶽神社に奉仕する御師の拠点であり、神社に参拝する講員のための宿泊施設であると定義して論を進めていきたい。

御嶽山における宿坊の位置付けを考える前に、まず、現在の御師の年間スケジュールを提示する。以下、年度始めの4月から順にみていく。4～5月までは講の代参の時期にあたり、宿坊には年間でもっとも講員が多く訪れる。また、近年数は少なくなっているが、5月には太々神楽の執行があり、その際は講員の総参りが行われる場合もある。本来、代参の時期は、4～7月上旬であるといわれてきたが、6～7月初旬までは梅雨のため代参に訪れる講が減るという。そのため、この時期は宿坊の準閑散期になる。

梅雨が明けて夏休みに入る7月下旬～9月までが、宿坊の繁忙期である。この時期、もっ

とも多く御嶽山に宿泊するのは、合宿や研修で宿坊を利用する一般客である。また、夏休みの子どもを連れて宿坊に泊まる家族も多い。夏休みの時期にあたる7月上旬～9月の宿坊利用の主な層は、講員以外の行楽を目的とした一般客になる。

加えて、秋の行楽シーズンにあたる10～11月は、紅葉や、御岳山観光協会主催の各種イベントに参加する一般客が多くなり、春期と夏期に比べ日帰り客が増加する時期でもある。

そして、12月に入ると、御師による各講への配札活動（講社廻り）がはじまると同時に、宿坊は閑散期に入る。12月下旬～3月上旬にかけて行われる講社廻りによって、御師が不在になることに合わせて、冬期の御嶽山では雪が多く降るため、御嶽山の入り込み人数が減ることがその理由である。しかし、年末年始は、御嶽神社の参詣者や、札を求める講員が宿坊を訪れるため、この期間の宿坊は例外的に多忙になる。

以上のことから、御嶽山の宿坊は、受け入れる客の性格とその時期が明確に分かれていることがわかる。宿坊が稼働している時期は4～9月で、その内、4～7月上旬に講社を受け入れ、7月上旬～9月に講社以外の一般客を受け入れている。また、御師が講社廻りを行う期間である12月下旬～3月上旬までは、宿坊の機能はほぼ休眠状態になっている。年間の半分は宿坊稼働とそれに付随する業務が主になっていることから、宿坊経営が、御嶽山の一山組織を支える大きな柱であることが指摘できる。

表2 御嶽山の御師の年間スケジュール

月	御嶽山の御師の年間スケジュール
1月	オフシーズン 講社廻り 正月祭
2月	オフシーズン 講社廻り 節分 初年
3月	オフシーズン 講社廻り(上旬まで)
4月	代参シーズン
5月	代参シーズン 太々神楽 日の出祭(朝大祭)
6月	梅雨のため準オフシーズン 大祓
7月	(下旬から)繁忙期 講員以外の宿泊客、学生の合宿対応など
8月	繁忙期 講員以外の宿泊客、学生の合宿対応など
9月	繁忙期 講員以外の宿泊客、学生の合宿対応など
10月	ハイカーなど観光客の対応
11月	ハイカーなど観光客の対応
12月	オフシーズン 講社廻り開始(下旬から)

(2) 山内からの動き—宿坊の民宿、旅館化—

次に、御嶽山と宿坊経営に関連する動きに対する山内からの声に注目する。

まず、昭和25（1950）年頃、御師職だけでは生活が困難な御師から都民観光の家をはじめたいという意見が上がり、民宿5軒が開業に至る³。このことによって、講員の宿泊基地である宿坊に、講員以外の入山者を宿泊させる民宿、旅館としての性格が付与され、講社以外の一般客の利用が増加していくこととなる。そのような宿坊の利用状況の変化を、東京都教育委員会が、二つの宿坊を事例として明らかにしている。以下、その利用状況をみていきたい。

M荘⁴では、昭和52（1977）年の講員利用者数が1,915人（うち休憩1,468人、宿泊447人）だったが、昭和58（1983）年には1,456人（うち休憩967人、宿泊494人）へと減少していると報告されている。一方で、昭和52年には講員以外の一般利用者が2,743人（うち休憩528人、宿

泊2,215人)、小・中・高・大学生の利用者が3,701人(全て宿泊)、昭和58年には一般利用者が1,545人(休憩213人、宿泊1,332人)、小・中・高・大学生の利用者が4,614人(全て宿泊)と報告されている[東京都教育委員会1986:9]。

以上から、講員利用者より、それ以外の一般利用者と小・中・高・大学生の利用者の方が多いことが確認できる。また、講員利用者の場合、宿泊より休憩利用が多く、一般利用者の場合、休憩より宿泊利用が多いことが指摘できる。合わせて小・中・高・大学生の利用者は全て宿泊利用という特徴がある。講員利用者、一般利用者よりも小・中・高・大学生の利用者が多く、全て宿泊であることに関しては、後述する林間学校での利用の結果だと推測する。

他方、N荘では、昭和52(1977)年の講員利用者数は403人(うち休憩175人、宿泊228人)で、昭和58(1983)年には446人(うち休憩298人、宿泊148人)と報告されている。一方で、昭和52年には一講員以外の一般利用者が797人(うち休憩248人、宿泊549人)、小・中・高・大学生の利用者が1412人(全て宿泊)、昭和58年には一般利用者が698人(うち休憩101人、宿泊597人)、小・中・高・大学生の利用者が1279人(全て宿泊)と報告されている[東京都教育委員会1986:9-10]。

表3 宿坊利用状況(東京都教育委員会1986をもとに筆者作成)

宿坊利用状況(M荘) 単位:人			
年	講員	一般	小・中・高・大学生
昭和52(1977)年	休憩 1468 宿泊 447	休憩 528 宿泊 2215	休憩 0 宿泊 3701
昭和58(1983)年	休憩 962 宿泊 494	休憩 213 宿泊 1332	休憩 0 宿泊 4614

宿坊利用状況(N荘) 単位:人			
年	講員	一般	小・中・高・大学生
昭和52(1977)年	休憩 175 宿泊 228	休憩 248 宿泊 549	休憩 0 宿泊 1412
昭和58(1983)年	休憩 298 宿泊 148	休憩 101 宿泊 597	休憩 0 宿泊 1279

このように、宿坊の利用状況はそれぞれ異なっているものの、昭和50年代には、講員利用者より、一般利用者と小・中・高・大学生の利用者が増えていることが確認できる。したがって、昭和25年以降にはじまる宿坊の民宿、旅館化によって、従来の講社の利用から、一般客の利用の割合が増加したといえよう。

(3) 山外からの動き—鉄道網の発達—

次に、山外からの動きとして、御嶽山における交通網、とりわけ鉄道網の発達とその背景について述べる。御嶽山に鉄道が開通するのは、昭和4(1929)年のことである。明治27(1894)年、青梅市日向和田の石灰石を青梅から立川まで輸送する手段として青梅鉄道が敷設されるが、御嶽山や奥多摩への観光客誘致の目的で、青梅鉄道は昭和4年に二俣尾～御岳間まで路線延長を行った。加えて、昭和10(1935)年10月1日、御岳登山鉄道(ケーブルカー)が開通する。青梅鉄道と御岳登山鉄道の開通によって、京浜地区と直結し、かつ登山が容易になったことは、御嶽山へ大きな影響を与えた。

青梅電気鉄道発行の『奥多摩案内』（発行年不明⁵）というパンフレットでは、次のように御嶽山が紹介されている。

御嶽山山上三十餘の御師の邸で、宿泊の便を図つて呉れます、宿泊に対しては投宿者が相當の心付を出す習慣になつてゐます……中略……府社御嶽神社には櫛眞智命を祭る社殿壯麗にして崇巖自ら襟を正さしむ海拔九四〇米の峻嶺なり山氣秀麗山頂の展望潤然として山容起伏の状海波の寄するが如く恰も緑の毛氈を以て被ひたるに似て美觀喩へ難し武相の平野一望の下に聚る山中名勝としては天狗岩鸚鵡石七代滝富士峰日の出山男具那峰大嶽山などあり山櫻新緑紅葉等特殊の趣あり山中到る處閑雅幽邃誠に人外の別天地なり御嶽登山鉄道は目下準備中近々開通の筈。

パンフレットでは、御嶽山の御師についての紹介と合わせて、御嶽神社をはじめとする御嶽山内の名所や、景観、豊かな自然が宣伝されており、鉄道会社も御嶽山への旅客誘致に積極的であつたことがうかがえる。このようにして御嶽山は東京近郊における観光地として注目されていくようになり、従来の信仰地としての性格と、観光地としての性格を併せ持つようになっていく。

また、昭和10年前後には、国民精神総動員運動の一環としての青年徒歩旅行やレクリエーション旅行が全国的に盛んになり、身体鍛錬や日本精神の涵養としての登山や名勝巡りが奨励されていくが、御嶽山にもその萌芽があつたことが以下の資料から確認できる。本資料は、「郷土愛の精神を涵養するため」に作成された小学生向けの教科書内の記述である〔東京府青山師範学校附属小学校教育研究会編1930：1-2〕。ここでは、御嶽山および御嶽神社の歴史を概説したあと、本所の名勝が紹介されている。

山中の景勝は男那峰の紅葉丸山の晩鴉殊に日の出山の展望極めて廣く、武蔵野の平野は手に取る如く……高山植物の採集避暑の最高適地と稱せらる盛夏の候と雖も自然に涼味を覚え心氣殊に清爽神秘の境に在らしむ⁶。

他方、学校教育の場ではないが、同時期に、関東周辺の名勝を訪れるサークル活動を行っていた団体も存在し、その団体の同人誌には、当時の御嶽山参詣の様子がわかりやすく記されているので、少々長いが、以下紹介したい。

新宿驛を午前八時四十五分に立つた吾々一向は二十餘名とは中々豪勢だ。途中一二の驛からも参加者があつて、立川の乗り換へでは十五分程を費し、青梅鉄道の客となつた。今日は悪天候の多い三月初には珍しい晴れた日曜日だ。多摩の山水に憧れる洋服子で車中は満員の盛況。日曜には郊外の名勝を訪づれると云ふ傾向は非常に強くなつて来た様だ。……中略……日向和田驛に十時二十分頃下車して、神代の渡しを目指して多摩川縁りに下る……この栈橋をバツクに一行の記念写真を撮つて吉野へ向かう……斯くて七四九mのピークを過ぎ、九〇三mの日の出山を経て御嶽神社に着いたのが三時二十分……社殿から十數丁で奥の院や七代の瀧などに行かれるのだが時間が無いのでコース通り一切を割愛して四時十分出発、表参道を一氣に下る。美事な杉並木で日光を遮ぎつて

居るので、凍結した道は滑り易かった。山麓の御嶽橋は美事な栈橋に代つれ居り盛んに道普請をやつてゐる、が射山溪の壯観は依然としてゐる。然し此の附近には料亭が澤山出来て俗臭濃く草鞋の吾等には微苦笑の限りである⁷。

以上の資料から、開業直後の青梅鉄道が郊外の名勝を訪れる行楽客で混雑していること、御嶽山周辺の名勝である吉野梅林と御嶽神社がセットで観光の対象とされていること、そして、御嶽山周辺が観光開発されていることが確認できる。

これらの流れを受けて戦後、奥多摩が首都圏の行楽地として注目されたことにより、昭和30～40年代の青梅線は行楽路線としての機能が高まっていく。昭和33（1958）年に新宿～御岳間で運転が開始された行楽臨時列車「吉野観梅号」が皮切りとなり、昭和43（1968）年には、新宿～御岳間の休日臨時快速「みたけ」のシーズン運行、昭和46（1971）年には奥多摩への延長が行われ、その後現在の「ホリデー快速」につながっていく。また、昭和44（1969）年に千葉～御岳間臨時急行「御岳もみじ号」が運転されたのを最初に、首都圏各方面からのシーズン運転の直通臨時列車も設定された〔青梅郷土資料館2014：98〕。この行楽路線の拡張によって、観梅、紅葉、ハイキングなど季節毎の行楽客の大量輸送が可能になり、講員以外の行楽を目的とした一般客の割合が増加していくこととなる。

表4 御嶽山における鉄道網の発達に関する年表（筆者作成）

年	御嶽山における鉄道網の発達に関する年表
昭和4(1929)年	青梅鉄道が二俣尾～御岳間まで路線延長
昭和10(1935)年	御岳登山鉄道(ケーブルカー)開通
昭和33(1958)年	青梅線行楽臨時列車「吉野観梅号」新宿～御岳間で運転開始
昭和43(1968)年	青梅線休日臨時快速「みたけ」新宿～御岳間でシーズン運行
昭和44(1969)年	青梅線臨時急行「御岳もみじ号」千葉～御岳間で運転開始
昭和46(1971)年	青梅線休日臨時快速「みたけ」新宿～奥多摩まで路線延長

（4）林間学校の誘致

最後に、御嶽山に大きな影響を与えたと考えられる林間学校について新聞記事⁸からみていく。また、昭和40年代の林間学校の実情については後述する。

御嶽山の林間学期の様子が新聞で報じられるようになるのは、昭和42（1967）年からである。少々長いが、初出の記事を以下引用する。

毎日新聞 昭和42（1967）年7月22日 都内総合版 20ページ

<野鳥、緑を友だちに 御嶽山では林間学校>

夏休みにはいった二十一日、青梅市の御嶽山で林間学校が開かれた。緑の少ない都会の子たちが待ちわびた日で、九月の新学期までに都内、神奈川、千葉、埼玉などの小中学生が二泊三日の予定で野鳥の天国の自然を満喫するという。

同林間学校の第一陣は中央（明石中）板橋（区立八小）世田谷（駒留中）葛飾（四ツ木中）杉並（区立一小）北（神谷中）渋谷（千駄ヶ谷小PTA）各区、神奈川県川崎市（新丸子、末吉、下平間、新町各小、今井中）のほか八王子市、府中市の児童会なども約二千人。……中略……宿舎の御師二十四軒にそれぞれ分宿、山の生活に入った。

最盛期は八月十日前後、約百二十校の小、中学生が来るが、ことしは例年より多く約三万人で賑わう。

昭和40年代に入ると、夏期の御嶽山が都内、神奈川、千葉、埼玉などからの林間学校を行う小中学生で賑わっている様子が伝えられるようになる。また、昭和44（1969）年の記事では、「ことしの利用者は二百四十九団体、約三万七千人で昨年の一割五分増。一般の行楽客が七月、八月で十二万人といずれも開山以来の記録だった」と報じられていることから、林間学校での利用がさらに増加し、「開山以来の記録」と称されるほど多くの小中学生が御嶽山を訪れていることがうかがえる。そして、昭和46（1971）年の記事では、「林間学校第一陣は都内、横浜などの十一校から千五百人。普段は三十分一本の登山ケーブルも、六分間隔でピストン輸送。……中略……林間学校申し込みは年々ふえ、ことしは八月中旬までにざっと百五十校、三万人のチビッ子客が予定されている」。昭和40年代に入ってから夏期の林間学校で御嶽山を利用する小中学生の数が3万人にまで増加したと伝えられている。このことから、昭和40年代が林間学校利用のピークであったことが確認できる。

林間学校の誘致にともなって、御嶽山では昭和40年代頃から東京都青年野外旅行活動宿泊所の指定を受け、宿坊の増改築が行われるようになる。昭和59年に実施された東京都教育委員会の調査時点で、宿坊28軒中、旧態を留めるのは8軒のみで、20軒の宿坊が増改築を行ったと報告されている〔東京都教育委員会1986：21〕。この宿坊の増改築によって、元々は講員のみしか受け入れる機能を持たなかった宿坊の収容人数が増加し、建物の構造が変化することで、講員だけでなく、「一般」の宿泊客も受け入れられる体制が整った。

4. 御師家と宿坊経営

（1）御師と宿坊経営の現状

後藤は、旅館営業について、「旅館全体を決定づける経営部分（営業や経理など）と、経営部分で決まったことをもとに、実際のサービス提供を担当する運営部分に分けられる」と述べ、経営部分と運営部分という分類を設定している。本稿ではこの分類を宿坊経営において援用し、論を進めていくこととするが、宿坊の場合、経営部分と運営部分に加えて、代参や太々神楽の際の諸儀礼の執行、滝行体験、神社案内などの宿坊毎で特色のあるプラスアルファのサービスが入ってくる。また、宿坊は御師家の家族経営によって成立しているため、経営と運営の区別に曖昧な部分もあるが、御師家の妻は主として運営に関する決定や判断を下す立場にあるといえよう。ここで、御師家の妻からの聞き取り調査で得たデータを提示し、宿坊経営の現状を押さえない。

御師家の妻Eに対する聞き取り（2018/03/13）

旅館業って本当に大変。朝から晩までいなきゃいけないし、そのあとも普通の温泉旅館のおかみさんと違って、従業員がいて番頭さんがいてっていう大きいところじゃないので、すべて家族でまかなうんですね。主人たちも普段は神主ですけど、うちにいれば番頭さんになってもらって、台所手伝うこともありますし、お布団にも行ってもらったり、お掃除したりっていう、そういうのを家族みんなでやらなきゃ成り立たないってところがありますよね。

御師家の妻Fに対する聞き取り（2018/06/24）

御嶽山の神主さんは一人で何役っていうほど、よく言われますけど、結婚してから消防団に入りますでしょ。お勤めをして、帰ってくれば宿坊の仕事をして、消防団の出動があると仕事があって、だから神主さんと、あと、畑行ったりとか。

繰り返しになるが、宿坊は家族経営で成り立っており、なおかつ御師は、御師業だけでなく多様な職務をこなす存在である。具体的な内容としては、御嶽神社の祭礼諸役に従事することに加え、宿坊経営に関する仕事において統轄を行う番頭の役割、そして消防や畑など、一人で何役も務める必要があることが確認される。

御師家の妻Gに対する聞き取り（2018/07/27）

夫は神社へ勤め、講に札を届け、講の人を泊めるけど、宿坊オンリーじゃない。民宿的なこともする。宿坊だから特別ではないと思う。民宿と同じような感じ。……中略……女の人が家の仕事をしないと、男の人だけではまわりきらない。

宿坊経営は、夫である御師と妻で役割分担がなされていることがうかがえる。御師は神社の職務、配札、兼業先の職務、宿坊経営、山内の消防団、畑仕事を行い、妻は「家の仕事」（宿坊運営）を一手に引き受けている。

（2）御師家の妻と宿坊経営の現状

次に、御師家の妻と宿坊運営の現状について聞き取り調査で得たデータを中心に提示し、その内容をみていく。まず、御師家の妻の仕事として、①運営管理に関する業務、②運営上の労働力としての労働が上げられる。①の業務内容は、アルバイトになりうる人材の確保、シフト管理、実際のサービス提供や接客に関する指示を出すことなどで、このような業務をこなす御師家の妻は、実質上、運営業務の責任者にあたる。続いて、②の業務内容を聞き取りデータから描写する。

御師家の妻Aの娘に対する聞き取り（2018/02/08）

いい意味でも悪い意味でも人を選ぶ仕事なんです。私が思ったのは、働いていて、できない人は本当にできないですよ、これ。難しいですもん。常にやっていることが接客だけだったらいいですけど、調理しながら接客して、案内しながら電話に出て、でも電話に出ながらも掃除をしてとか……中略……結構順番とかを考えて、今何すべきなのかなって考えながらも、でも効率よく進めないとチェックインの時間になっちゃうし、とか。そうなってくると、誰にでもできることじゃないのは確かで。

以上のことから、御師家の妻は調理や掃除、サービス対応などの労働力を提供し、宿坊運営の統括を行う立場であることが読み取れる。御師家の妻の1日のタイムスケジュールをみてみても、そのことが確認できる。

表5 宿坊のタイムスケジュール

宿坊のタイムスケジュール(繁忙期)	
時間	内容
6:30	始業 朝食準備
7:30	宿泊客朝食(7:30～9:00まで)
8:30	宿泊客朝食片付け
10:00	チェックアウト(清算)
	客室清掃、宴会場清掃設置、風呂掃除、トイレ掃除、布団干し、リネン類の洗濯
13:00	休憩(昼食、昼寝、午後からの予定確認)
14:30	夕食準備開始(お湯沸かす、箸・コップなどのセット、皿の準備、小鉢など冷たいまま提供する料理の準備)
15:00	チェックイン(帳簿記入、客室案内)
16:00	風呂開け
17:00	夕食準備(焼き魚、揚げ物)
18:00	宿泊客夕食配膳
20:00	夕食片付け
21:00	風呂閉め 終業

以上のように、御師家の妻は、ルーティーンの業務（食事の支度、掃除、風呂準備など）を行い、この間、御師（夫）は神社の仕事や車を使う用事（買い出し）で出かけているため、宿坊にいることは少ない。また、チェックインは妻と娘、もしくはアルバイトが行うが、チェックアウト（清算）は主に御師が担当していることから、経営部分（経理）に関する業務は御師が行っていることがわかる。

5. 各時代にみる御師家の妻の役割

(1)「奥様」時代

ここで、時代を少し遡ってみると、御師家の妻の役割が少しずつ変化していることに気が付く。仮に、昭和10～20年代を「奥様」時代、昭和40～50年代を「おかみ」時代と区分して、各時代の御師家の妻の役割を追ってみたい。それぞれ、①嫁となる人の属性、②御師家の妻の仕事、③当時の妻を象徴するエピソードという項目を立てて、役割の変化をみていく。まず、「奥様」時代から確認していこう。

御師家の妻Dに対する聞き取り（2018/03/23）

うちのおばあちゃんなんか本当のお嬢様で、このすぐ下のね、日の出の下の所謂昔々からのお家のお嬢さんでしたからね。それにいい時代…嫁に来た頃はいい時代だったんですよ。なんていうんですか、奥様でいられて、赤ちゃんができればすべて見てくれるねえやっというんですか？そういうのが一人ずついる時代。そのくらいの裕福なうちだったんですこは……中略……私が嫁に来た時は女中さんですね、そういう人はどな

たもいませんでした。おばあちゃんが赤ちゃんを産んだり、そういう時代はものすごいいい時代だったんじゃないですか。自分はお乳をくれるときだけしか赤ちゃんが来ないって言ってましたよ……中略……本当の奥様でした。私が来たときにね。それで女中さんでいられた方たちがうちに来ると、奥様奥様って。いらっしゃったときもいまだに言ってましたから。そういう奥さんと呼びなさいってそういうことだったみたいですね。

御師家の妻Dに対する聞き取り（2018/03/23）

おばあちゃんがやってらっしゃったときには板前さんがいてすべて料理をやっていたんですよ。だから奥様でなんにも、本当のいい時代っていうんですか？はっきり言って。いい家からいらっしゃいましたからね、おばあちゃんはこの下の日の出村の庄屋さんの娘さんなんですよ。おじさんは、日の出町の村長を何期もやってらっしゃって、私たちなんかの酒屋の娘とは全然違うんですよ。普通だったら酒屋の娘がこんなところに嫁に来るのは考えられなかったんじゃないですか。

①嫁となる人の属性であるが、昭和10～20年代に嫁いできた御師家の妻は御嶽山山麓（もしくは青梅近郊）の家格の高い家の出身であり、女中、男衆と呼ばれる住込みの従業員からは「奥様」と呼ばれていたことがわかる。また、当時の嫁入り儀礼を見てみると、御師家の妻には行儀作法も求められていたことが推察される。かつての御嶽山では、双方の親戚および招待客の座敷、その後、山内の組合と付き合い⁹の座敷、最後に勝手働きの付き合いの女性たちの座敷、というように計三回入れ替えて披露宴を行う場合が多かった。そして、最後に「嫁さんのお茶」といわれる仲人夫人が淹れたお茶を嫁が参列者全員に配るという一種の通過儀礼があった〔小泉1986：136〕。

昭和50年代頃まで嫁さんのお茶は行われていたが、以降、披露宴を山外のホテルなどで行うことが増え、嫁さんのお茶をやることはなくなったが、お茶を出すときの作法などを通して、御嶽山の人々が嫁としての振る舞いを確認する機会であったと考えられる¹⁰。

②御師家の妻の仕事であるが、当時は勝手仕事を行う女中や板前、強力仕事を行う男衆などの住込みの従業員がいたため、御師家の妻は宿坊運営上の労働力を提供する必要がなかった。最後に③当時の御師家の妻を象徴するエピソードをみていく。

御師家の妻Cに対する聞き取り（2018/02/19）

着物を着てみんなで旅行をした。トランクに着物を入れて一泊旅行。旅行のためのそろいの浴衣を縫って行ったし、昭和の30年から40年くらいまではいらっしゃいませっていうのも着物だった。

御師家の妻Cに対する聞き取り（2018/06/14）

要するにおかみさん？まあ御師さんの奥さんって感じの方が多かったから、昔は着物着てられた方多かったですよ。

御師家の妻Cに対する聞き取り（2018/06/14）

お着替えて、スーツケースのなかに着物を入れてくる。バス旅行なのに。私なんかそ

んなまさかそんなことしなかったけど。大時代的なおばあさんたちはお着物あるんだと思って。お着替えて……中略……それはだいたい40年から50年代ですね。もう平成になったらそんな人いない。その当時はね、良き時代。講社がバンバン来ていて、太々神楽も何十もあったって年ですよ。……中略……一つ太々あげると一年食べていけるくらいっていう話。だから人もいっぱい雇えるし、人も安かったせいもあるけど、お大尽でいられたんじゃない？その当時は。いられたんだと思う。今はもう何分の一って減っちゃった。講だけじゃ生きていられないんで、それで一般のお客さんを。

以上の語りから、当時の御師は「お大尽」とみなされ、御師家の妻は着物を着て接客をする「御師さんの奥さん」であったことが確認できる。これらの語りから、昭和10～20年代に嫁いできた御師家の妻の特色をまとめると、以下の三点になる。①御嶽山山麓の家格の高い家から嫁いでくること、②女中、男衆と呼ばれる住込みの従業員がおり、従業員からは「奥様」と呼ばれていたこと、③女中、男衆と呼ばれる住込みの従業員が料理、掃除などを担当し、御師家の妻は宿坊運営上の労働力の提供は行わなかったこと。

(2)「おかみ」時代

次に、昭和40～50年代に嫁いできた御師家の妻を仮に、「おかみ」時代と区分して御師家の妻の役割を追ってみたい。ここでも、「奥様」時代同様、①嫁となる人の属性、②御師家の妻の仕事、③当時の妻を象徴するエピソードという項目を立てて、役割の変化をみていく。

御師家の妻Aの娘に対する聞き取り（2018/02/08）

多いのは、ここにアルバイト来てそのまま使えるからってことで結婚。……中略……結構いるんだよ。アルバイトしててそのまま行っちゃうのが。

御師家の妻Aに対する聞き取り（2018/02/08）

（Qいつから宿坊でアルバイトをしていましたか？）高校時代。高校三年間だね……中略……こっちは高校時代の夏休みなんて暇だから、友達と一緒に。友達三人くらいで。同じクラスだったから。（夫と）……中略……じゃあやってみようかなんて言って。

御師家の妻AとBに対する聞き取り（2018/02/19）

A「お店のおばさんの紹介でしょう？お店にアルバイトに来てたんですよね？」

B「そう。a売店に。親戚だからね」

A「もう何年になります？お嫁に来て」

B「49年」

A「20いくつで来たんですか？」

B「21かな」

以上の語りから、10代後半～20代前半の頃、御嶽山でのアルバイト経験がある女性で、なおかつ御師家の子どもと同級生、御師家と親戚という繋がりを有し、アルバイトで通える範囲内（御嶽山山麓）に居住していた女性が御嶽山に嫁ぐ事例が確認された。このように、御

師家の子どもの同級生が御嶽山でアルバイトをしている事例はよく語られる。アルバイトは、小学校、中学校、高校の同級生ネットワークを通して集められることが多く、高校生入学頃からアルバイトをはじめ、高校卒業の際、進学、就職を機に辞めることが多い。一方で、就職してからも土日だけのアルバイトを継続する場合や、結婚出産を経てからアルバイトを再開する場合もあるという。次に②御師家の妻の仕事在林間学校との関連に注目してみたい。

御師家の妻Dに対する聞き取り（2018/03/23）

主人の父親が観光協会長みたいなのをやっていて、それで東京都の、林間学校っていうのをね、講だけではとても食べていけないですし、林間学校の斡旋をなさって、それで林間学校が来るようになったんだそうです。今はね、林間学校自体が、学校自体がみんなおしまいにしちゃうんですよね。ここ何年も…。私が嫁に来た時は夏がはじまると毎日帰れば入ってくる、帰れば入ってくるっていうか、一週間くらいはどこのお家も林間学校っていうのが来ていたんですよ……中略……昭和の40年頃ですね、私が昭和の46年に嫁に来た時はもうね、一週間くらい毎日、だからその前からだったから、私が来た時にはすでに来てましたから。

御師家の妻Cに対する聞き取り（2018/06/14）

昭和47、8年、その頃からちょっとお嫁さんの質が変わってきたかな？って感じ。その頃から着物着る人はいなかったよね。そのお姑さんたちは着てたけど、その今言った私からはじまって、着たのはあまり見ない。着てられないっていうか。だんだんお客さんも増えたりして、それまでは講のお客さんだけだったけど、ちょうど私が来た頃から林間学校が真っ盛りの頃。夏なんかね、12時過ぎに寝て、3時4時に起きないとご飯を炊いてっていうのが、林間学校だと6時半とか7時とかの朝食って言われちゃうと、5時には仕事始めないとならないでしょ。だからそんな時代だったから、着物なんか着てられない。私がここに来てから着物着たのは、なにかのお祝い事とか。結婚式とかそれくらいしか着たことないです。一代前の人たちは、なにかあるっていうと着てたよね。そこではっきり分かれた。昭和40年代に来たお嫁さんたちは何かないと着物着なかったから。その人たちのお姑さんたちは着物を着てた。

以上の語りから、昭和40年以降ピークを迎えた林間学校によって、御師家の妻の役割が変化していることが確認できる。「奥様」時代（昭和10～20年代）には存在していた住込み従業員がいなくなったことで、これまで女中が行っていた料理、掃除などの仕事を御師家の妻が担うようになった¹¹。そのことによって、御師家の妻は宿坊運営上の統括を行う「おかみ」になっていく。また、「私が嫁に来た時は夏がはじまると毎日帰れば入ってくる、帰れば入ってくるっていうか、一週間くらいはどこのお家も林間学校っていうのが来ていたんですよ」という語りや、「12時過ぎに寝て、3時4時に起きないとご飯を炊いてっていうのが、林間学校だと6時半とか7時とかの朝食って言われちゃうと、5時には仕事始めないとならないでしょ」という語りを追っていくと、当時の忙しさは相当なものだったことが想像できる。その林間学校受け入れ期間中の忙しさについての語り以下である。

御師家の妻Cに対する聞き取り（2018/06/14）

昭和の時代のお嫁さんたちは我慢してたわけじゃない。……中略……昔はね嫁は出て行けなかった。一夏下りられなかった。夏休み入ると9月にならないと下りて行けない。よくて8月の最後書道の講習会があって、一番最後の金土日で日曜日に帰るんですけど、その晩に下りて、ディズニーランドの近くでホテルとって、お昼3時に降りて、6時から入るチケットあるじゃない？それで入ってそしてホテル泊まって、次の日にもう一回行った覚えがあります。それが限界だった。夏休みに小学生を二人連れて、主人は会社員で行けなかったけど、私が子供を連れて行って。それが夏休み一回だけ連れて行っただけ。よそのところはどこでも親が連れて行けるのに、観光地だし、林間学校とか合宿があるからお嫁さんが下りていけない。そのときに下ろしてもらうのが最後の喜びでした。

昭和40年代以降に嫁入りした御師家の妻は、林間学校や合宿などで忙しい夏期は、山から下りることができないほど多忙だったことから、昭和40年代が宿坊運営と御師家の妻の役割にとっての転換期だったといえよう。そのことに加えて、夏休みなのに自分の子どもをどこにも連れていくことができなかったことや、夏休みの最後にディズニーランドに行くのが限界だったという語りからは、多忙であり山から下りられなかった彼女たちが、母親としてのジレンマを抱えていたことも伺える。続いて、③当時の妻を象徴するエピソードを紹介したい。

御師家の妻Cに対する聞き取り（2018/06/14）

（嫁いだ7年後に姑が亡くなったことに対して）28のときに誰もいなくなっちゃったから、女一人だった。……中略……男の子しかいないでしょ。私が出て行くわけにはいかない。おじいさんに、もうお前は嫁じゃないんだよ。ここのおかみになるんだからって言われて、え～？って。本当え～？ってなりました。

以上の語りから、昭和50年代には家族内でも御師家の妻はおかみとみなされるようになっていることが確認された。このことから、実際に担っている役割と期待される役割が一致していると考えることができる。ここで、昭和40年～50年代に嫁いできた御師家の妻の特色をまとめると、①10代後半から20代前半にかけて御嶽山でのアルバイト経験を有する御嶽山山麓に居住していた女性が嫁ぐようになったこと、②女中、男衆などと呼ばれる住込みの従業員がいなくなり、それまで御師家の妻が行ってこなかった宿坊運営上に必要な料理や掃除、サービス対応などの業務を行い、運営上の統括者である「おかみ」になること、③講社を受け入れる宿坊の機能と、林間学校などの講社以外の一般客を受け入れる民宿の機能を併せ持つことによる宿坊運営上の仕事の多様化が、御師家の妻の業務内容と役割期待を一致させたということの三点が指摘できる。

6. 分析

（1）宿坊の変化と御師家の妻役割の変化の相関について

以上、宿坊運営と御師家の妻の役割変化について論じてきた。鉄道網の発達や戦時下ツー

リズムの影響など外的要因から、戦後の御嶽山は大きく変化していくこととなる。それにもなって、入山者の性格や宿坊の営業形態も変化した。ここで今一度、御嶽山にとっての宿坊と御師家の妻の役割がどのような位置付けになるのか確認したい。

まず、冒頭では宿坊を、武蔵御嶽神社に奉仕する御師の拠点であり、神社に参拝する講員のための宿泊施設であると定義した。御嶽山の御師は、神社の諸役や配札活動などの御師業だけでなく、宿坊経営、山内の消防団、畑仕事など多様な業務を担当する存在であり、一方御師家の妻は、御師の業務を補完的に担当する宿坊のおかみの役割を持つ。そのような宿坊と御師家の妻の役割に大きな影響を与えたものとして、本稿では林間学校の誘致をあげた。

昭和40年代に利用のピークを迎える林間学校を契機として、宿泊客の性格が変化していくが、それにもなう形で、講社以外の宿泊客に対応するため、宿坊の増改築が開始される。建物の構造変化による収容人数の増加は、一般宿泊客の受け入れを可能にしたが、御師家の妻の役割をマルチタスク化させていく要因ともなった。また、この時期から、宿坊経営体を支えていた住込みの従業員や季節労働の従業員はいなくなり、単発のアルバイトが入りはじめる。林間学校誘致と従業員の性格変化によって、従来「奥様」でいられた御師家の妻は、宿坊運営を統括する「おかみ」へ求められる役割も変化していく。

これらの宿坊と御師家の妻の相互関係を整理したものが以下の図である。昭和20年代後半以降、「講だけでは食べていけない」一部の御師家が民宿、旅館化し、昭和40年代以降になると、林間学校の誘致を契機とする宿泊客の性格変化と宿坊の構造変化によって宿坊運営業務が多様化していくことは先にも述べた。この表をみると、宿坊機能と御師家の妻の役割変化は連動しており、宿坊機能の変化が御師家の妻の役割変化を惹起した要因であることが明らかである。

表6 宿坊と御師家の妻の相互関係

年代	宿坊	御師家の妻
昭和10年	講社に対する対応	従業員から「奥様」と呼ばれていた時代。 着物を着ての接客。 料理や掃除などの業務は住込みの女中、 男衆、板前などが行う。
昭和20年	民宿・旅館化開始(525年～)	
昭和30年	講社、ハイカーなど季節ごとに性格の異なる入山者への対応。 林間学校利用のピーク。 それにもなう宿坊の増改築による収容人数の増加。 →講社を受け入れる宿坊としての機能。 + 一般客の受け入れ機能。 ＝民宿化の完了。	
昭和40年		料理、清掃、荷運びなど、 女中、男衆、板前が担当していた宿坊運営上の仕事を担うようになる。 →宿坊運営業務の責任者である「おかみ」としての役割に変化。
昭和50年	講社＋一般客に対する対応	

(2) 先行研究との関係について

最後に、冒頭で取り上げた旅館のおかみと寺族、牧師夫人と御嶽山の宿坊と御師家の妻の役割を比較し、それぞれどのような特徴があるのかを検討することで結論としたい。

まず、旅館のおかみと御師家の妻を比較すると、旅館営業においては、料理、掃除など各業務を担当する専門の従業員が存在し、おかみは旅館経営体の一員として従業員とともに働きながら、それら運営上に必要な業務を統括する立場になる。御師家の妻も経営体の一員と

して働く点については旅館のおかみと同様だが、一方で、家族経営が基本の宿坊では、現状、各業務を担当する専門の従業員がいないことから、旅館のおかみに比べてより多様な業務を担っているといえることができる。

次に、寺族、牧師夫人と御師家の妻を比較すると、御師家の妻は直接的に神社運営に関わることがないことに加え、宿坊運営の統括者という役割があるため、寺族、牧師婦人と比べると、より職業的な性格を持っている。また、寺族、牧師夫人は、寺や教会運営を直接的にサポートし、檀徒、信徒の信仰上の模範となることが期待されていることに加え、夫である住職、牧師との間に信仰上の師弟関係が結ばれている場合もある。しかし、御師家の妻はこのような役割は期待されず、夫である御師との間に信仰上の師弟関係が結ばれているとも言い難いという相違点がある。その理由として、具体的な経典や教義が存在しない神道と、仏教、キリスト教では宗教の形態が異なることが挙げられる。

以上のことから、御師家の妻は、直接的に神社運営に関わることはないが、神社と講社の結節点である宿坊運営の統括者であり、宿坊運営という面から御嶽山を支える役割を担っているといえる。すなわち、御師家の妻は、御嶽山の一山組織を構成する重要な柱である宿坊を現存させるという点で大きな力を発揮している。一見すると御師家の妻は、あまり表に出てこないため、一山組織の周縁に位置しているようにみえるが、周縁ながらも実は御嶽山にとって重要な役割を果たしている。

7. おわりに

以上、御嶽山における宿坊と御師家の妻の役割の相関とその変化を論じてきたが、今後の課題として二点指摘して本稿を閉じたい。一つは、林間学校がいつからどのような経緯ではじまったのかという点である。本稿では林間学校の利用ピークと御師家の妻の役割変化に焦点を当てて論じたため、山内でどのような意見が出されて、それが誰によってまとめられ、林間学校の誘致が行われたのかということに関しては触れることができなかった。この宿坊の形態変化を招いた林間学校の誘致に関する動きについては別稿で論じたい。

もう一つは、なぜ住み込みの従業員や季節労働の従業員がいなくなったのかという点である。従業員の不在によって御師家の妻の役割が大きく変化したことは上述したが、この点についてはくわしく論じることができなかった。当時の御嶽山の周辺地域と、そこでの相互関係を、今後の調査で明らかにしたい。

参考文献

- 靱矢嘉史2012「在地神職の秩序意識——武州御嶽山を中心に——」『歴史評論』743号、34-48頁。
———2015「御師と神社—武州御嶽山御師の特色—」『古文書にみる武州御嶽山の歴史』岩田書院、41-63頁。
青梅市郷土博物館編2014『青梅線開通120周年開館40周年特別展』青梅市郷土博物館。
川橋範子2012『妻帯仏教の民族誌—ジェンダー宗教学からのアプローチ—』人文書院。
川又俊則2002『ライフヒストリー研究の基礎—個人の「語り」にみる現代日本のキリスト教—』創風社。
関東旅行クラブ1931「青梅梅林を探ね更に雪の御嶽神社詣」『旅路』1輯。
小泉凡1986「御岳御師集落の産育・婚姻」『青梅市御岳神社御師集落文化財調査報告』東京都教育委員会、130-137頁。
後藤知美2012「創られていく労働観—旅館業を中心として—」『筑波大学地域研究』33号、167-189頁。

斎藤典男1970『武州御嶽山史の研究』隣人社。

西海賢二1983『武州御嶽山信仰史の研究』名著出版。

東京都教育委員会1986『青梅市御岳神社御師集落文化財調査報告』東京都教育委員会。

東京府青山師範学校付属小学校教育研究会編1930「御嶽山附御嶽神社」『東京府郷土資料郊外編』。

長沢利明2000a「御嶽山の御師集落」西郊民俗談話会『西郊民俗』170号、4-16頁。

———2000b「御嶽御師の御犬講」西郊民俗談話会『西郊民俗』171号、1-9頁。

———2000c「武州御嶽講と代参」西郊民俗談話会『西郊民俗』172号、9-20頁。

———2001「武州御嶽講と御師の配札」西郊民俗談話会『西郊民俗』174号、1-12頁。

武蔵御嶽神社及び御師家古文書学術調査団2015『古文書にみる武州御嶽山の歴史』岩田書院。

———2018『武州御嶽山の史的研究』岩田書院。

【付記】

本稿の執筆にあたり、御嶽山のみなさま、特に御嶽山婦人部のみなさまには大変お世話になりました。記してみなさまに心から深謝申し上げます。

注

- 1 武州御嶽山に関する近年の研究成果は以下の通り。東京都教育委員会1986『青梅市御岳神社御師集落文化財調査報告』東京都教育委員会。長沢利明2000a「御嶽山の御師集落」西郊民俗談話会『西郊民俗』170号、4-16頁。同2000b「御嶽御師の御犬講」西郊民俗談話会『西郊民俗』171号、1-9頁。同2000c「武州御嶽講と代参」西郊民俗談話会『西郊民俗』172号、9-20頁。同2001「武州御嶽講と御師の配札」西郊民俗談話会『西郊民俗』174号、1-12頁。靱矢嘉史2012「在地神職の秩序意識——武州御嶽山を中心に——」『歴史評論』743号、34-48頁。武蔵御嶽神社及び御師家古文書学術調査団2015『古文書にみる武州御嶽山の歴史』岩田書院。同2018『武州御嶽山の史的研究』岩田書院。
- 2 2015年2月26日御師Aに対する聞き取りより。
- 3 講数の少ない御師は御師業だけでは生活が成り立たず、畑仕事などの日雇い労働をする必要があった。しかし、神社の仕事は講数の多い御師、少ない御師の区別はなく平等。なお、御嶽山の御師はそれぞれが担当している旦那場が決まっており、固定化されていたため講数の少ない御師が布教活動をして講数を増やすことはできなかった〔西海1983：317-318〕。
- 4 M荘、N荘という表記は、東京都教育委員会1986『青梅市御岳神社御師集落文化財調査報告』、9-10頁に依拠している。
- 5 発行年は不明だが、「御嶽登山鉄道は目下準備中近々開通の筈」と書かれていることから、青梅鉄道御岳駅が開通する昭和4年から、御岳登山鉄道が開通する昭和10年の間に作成されたと推測される。
- 6 東京府青山師範学校付属小学校教育研究会編1930「御嶽山附御嶽神社」『東京府郷土資料郊外編』284-285頁。
- 7 関東旅行クラブ1931「青梅梅林を探ね更に雪の御嶽神社詣」『旅路』1輯。
- 8 新聞記事については、適宜旧字体を新字体に改め句読点を付した。見出しは<>に入れて記した。以下傍線部筆者。
- 9 御嶽山には、組合と付き合いという社会組織が存在する。組合は、冠婚葬祭、祭礼行事などの際に相互扶助を行う組織である。御嶽山居住者は全戸加入し、全部で7組に分かれている。諸祭礼、諸行事の際に先頭に立って仕切り、仕事をこなす立場にある。また、付き合いは、病気の見舞い、結婚、出産、七五三、葬式、一周忌の際に相互扶助を行う組織である。付き合いは、一人付き合いと二人付き合いに分かれており、一人付き合いは夫、二人付き合いは夫婦で参加することになっている。冠婚葬祭の際に、組合が取り決めた役割分担に基づいて実際に労働力を提供するの付き合いの人々となる。
- 10 昭和20年代頃までは、結婚式の参列者が、嫁が着ている着物を触り、「本当に質の良いものか確かめる」

こともあったという（2018年2月19日御師家の妻Cに対する聞き取りより）。

- 11 昭和40～50年代には住み込みの従業員や、代参の時期にあたる春期の季節労働者はいなくなるが、その代わりに、忙しいときだけ来てもらう単発のアルバイトを宿坊で雇い始める。以下、御師家の妻Dに対する聞き取りと御師家の妻Aに対する聞き取りのデータを示す。「昔はね、私が来た頃はアルバイトの子なんか頼んでね、息子のお友達なんかが来て、3、4人構わず泊まり込んで、アルバイトやってた」（2018年3月23日御師家の妻Dに対する聞き取り）。現在も、忙しいときだけアルバイトを頼むが、それができない場合は、御師家の妻同士で手伝いを依頼しあっているという。「結局奥さんが空いてるわけじゃない。そういうときにうちが忙しいと、その山のなかで奥さん同士がこう手伝いに来てもらうってこともしてるね」（2018年2月8日御師家の妻御師家の妻Aに対する聞き取り）。このことから、奥様時代からおかみ時代にかけて、従業員の性格も変化していることがわかるが、この問題に関しては別の機会に論じたい。